

認証である「人民の軍隊—人民、の關係のあり方、及び、それを包括するところの人民内部の團結のあり方、そしてその矛盾の止揚のあり方」の主題として、今回、の兩者不可分の冷徹たる現実を捉えると共に、その現実を皆無と置いていい程に、ほとんど、共有しえなかつたことにおいて、激變する連合赤軍の兄弟たちをして、今回の事態に至らしめた責任を、自ら自身を、五十歩百歩に同罪であることとして、共有せざるをえないし、かかる責任において、連合赤軍兵士自身の生きた政治的見解の公開の保障、事実關係の調査、各關係者の見解の集約、などの任務を通じ、近い将来、決して叔力の中にあるす、必ずや、人民の手中において、今回の現実が、そしてその主役たる連合赤軍の兵士たちが、審判され、全人民の教訓へと血肉化させるべく、その苛酷、かつ、長期にわたる作業の一翼を担うであろう。

最後に、心ある至ての兄弟たちへ、今こそ、原則を堅持し、大同團結し、斷乎として、その限りない恐怖ゆえに狂喜する叔力—マスコミの總攻撃に抗してゆこう。そして、何として、七〇年代版「六至協」の再演を許してはならないことを再確認しよう。

銃撃戦の開始 万歳!

故、連合赤軍兵士 追悼!

3月21日

92

我々は今回の事態に関し、つる通信第6号紙上に於いて日本赤色救援会を明らかにした。この声明に於いて我々は革命戦士とそれを担うところの人民の軍隊—人民の原則的な問題を再び確認した。それはまた、現時点に於ける我々の最低限度の運動方針の決定でもあった。従ってそれを物質化させるべく次のようなアンケートを獄中戦士に求めた。

★アンケートに関する獄中戦士と我々の確認事項、①このアンケートは10日以内に日本赤色救援会に集約する。

②アンケートを集約した後、個々の獄中戦士へ、個々の問題的視点の一応り解答を我々の考えを早急に書簡を送る。

③②を確認した獄中戦士は自らの考え、意見総括を日本赤色救援会へ書簡を送る。

④③の書簡をもとにして、今回の事態の総括の前提として、その全ての書簡を日本赤色救援会で整理、編纂し、全ての獄中戦士及び獄外戦士にこれを配布する。

### 《アンケート》

I. A 連合赤軍銃撃戦をいかに人民裁判に関する情報(新聞、コミック)の状況

B Aの状況より判断する戦士の考え、意見(尚、整理の便面上、この項の分量は原則として便セン3枚とする。)

93

II、この間の日本赤色救援会の諸活動及び機関紙に於ける通信に関する意見。

III、A 差入れ、面会(誰に)迄に於ける状況及び希望

B 健康状況

注、1、上述のアンケートは書簡を送ること。

2、対叔力の組織防衛、又味方内部の混濁を防止し、連行を強化につとめ、今後、差入れ接見、又通、情宣等の一切の対獄中、対市及社会間の赤救の代名詞として統一個人名称(松本一美)を採用します(今後の赤救宛り書簡、宅下げ等は「あ、つる社気付、松本一美」とされたし。

團結!團結!

※本特集号に於いて以上の要領をまとめ上げた獄中戦士より赤救に寄せられた見解(アンケート)解答を以下掲載するものである。

—上野勝輝(東拍)—

I. A 読売新聞、その他若干の週刊紙だが、状況は「よくない」

B 革命の暗黒を吹き飛ばし反動の虎に勝ち抜ける赤い火を燃やそう!が僕の基本的な考え。骨格はD同志殺しの内因をとことん告発し、

94

えぐり出し、自己批判する事。それは、連合赤軍だけの問題でなく、あらゆる左翼、プロレタリア人民の思想にまで及ぶものであり、個人組織の自己批判を集中し、左翼の体質をとことん変える契機としなければならぬ。②①は党綱領問題へ物質化される方向を組織活動を系統化する事と同時に一体になされねばならぬ。その場合、綱領に體現しえない内因の不断の共産主義的高次化をはかるための共産主義思想、唯物弁証法、哲学問題を、綱領の背後に確立する方向が同時に必要。③④を今回の事件の持つ意味を歴史的階級的位階の上にはっきり位置づけねばならぬ、むなしいと、花園のようにテンデ民コロ以下(民主共産国のスローガン)といった、およそ百年昔の五億者至国かんなの下で革命をやるような問題を提起したりして、(六至協以下)に反ったり「銃撃戦支持」層を裏切るような変節をとげたりする。④⑤の上でようやく方針が設定される。そこでは、対連合赤軍、対人民、等々いろいろ、どうするかが、問われる。葬儀、調査報告文、総括方針共同討論機関の設置、等々この問題だけの方針と、全体の階級闘争(沖縄、学費、自殺隊、...)への方針確定が必要。それは、共産主義の大众的軍事路線をプロレタリアートの確立へ系統化する地下武装労働者党の建

95

設。⑤⑥は、破防法とか、敵の攻撃、学費、沖縄  
・ 諸大報闘争の成熟とその中で党的細胞建設  
の段階と、その軍事細胞建設の指導性等々、いろ  
いろな要因の複雑の中で、具体的に解決しなけ  
ればならないが、この問題は獄中から充分タツシ  
しえないので詳論は止める。

II 「さ」の通信は迅速に様々な問題に対応して  
いてよいと思う。しかし、これは党的不在を  
カバーするような問題を持っており、その真  
党が独自に別に迅速な活動をする体制を早急  
に作らないなら、矛盾が集中して、「さ」の  
なりか党なのかその片われ細胞なのかわから  
んものになってしまう。

III、A、略 →注(原又通リ) 編集者  
B、略

アンケートが入ったのが3/22の出廷の前、それ故、  
今日になり、遅れているが許されよ。

— 石井 勝 (横次) —

I、A、銃撃戦と大量「処刑」について、朝日新聞は  
半分以上抹消されたが、なりゆきの太筋は  
わかる。細かい点はわからないが、太筋か  
ら色々と推論している。

B、「処刑」問題について、私は、立場が異なる  
96

ので意見は暫く保留させて置きます。(但し大き  
な疑問として、昨年12月18日に長野烈士一周年集  
会去開催されたがその前日に山籠りが始まった訳  
だから、この12月以降、フロント赤軍派と日共革命  
左派の各政治局(中央委員会)はどこへ行、てし  
まったのだろうか。) (また「処刑」問題の一定の終  
結は、各方面に対する配慮、とりわけ長野、群馬  
にいる逮捕者のことを配慮して慎重に、時間をか  
けてなされるべきだと私は思います。

II 「さ」の通信6号の声明の方向性は極めて通  
切だと思います。精力的になされているのでし  
ょうが、特に森、永田両君の弁護士救済をし  
っかりさせて下さい。(彼らは敵への屈服か  
らもう立ち直れないのですか。)

III、A、本や機関紙等の差入は「さ」の社もほ  
じめ神奈川、多岐図書館センターがし  
てくれています  
B、特に云う程悪くなし。(但し歯槽沈着が  
味、歯肉がはってきている。痛丹、出血  
血はないが固い物を食べると歯が動え易い)

97

貞

— 藤沼 吉 (東拘) —

〈アンケートへの解〉親愛なる「さ」の社諸氏へ  
I Aの状況について、

だいたいB「新」の報道はスミをぬれなかった  
。人民裁判(?)—処刑(?)の具体的内容について所  
々けされていたが全体を知る為のさまたげにな  
らなかった。

I B、Aに関する意見、

B「新」は正確でなく、余りにセンセーショ  
ナルに取り立てているので、現実的具体的内容—  
真相についての全容は逮捕された15名の戦士達  
の発言・発表を待たせたい。だが獄中でB「  
新」を自からの主体的取り方によって解釈すれ  
ば、それも決して核心を捉えているとは言えな  
いかも知れないが、客観的に正確を導いている場  
合もある。

(1)、人民裁判—処刑、これは一体何んなのか(?)  
現実的には血の粛清—虐殺を意味するらしい。  
だが問題は核心は、革命的規律、共産主義的人  
格—共産主義的隊内生活、共産主義者の存在様  
式存在形態、主要には、組織形態が向われる。  
だがこれは余りに色濃格で現象的であり、同  
時に戦時問題革命戦争の戦時的性格、戦術、  
政治、思想的向題と密接な関わりがあり、それら  
と分離—結合して、総体として把握しなければ

98

なるない。だから味方内部の矛盾の処理の仕方  
の誤りとして、総括するのでは不十分、一般  
的、典型的でしかない。やはり革命戦略・革命  
記の方法記—共産主義—戦時政治、組織的様  
々な視座から総括されなければならない。尚  
且の根柢は根深く政治主義的に乗り切ろうとし  
ておぼして乗り切れるものではない。下手な対  
応すれば、連合赤軍の壊滅・解体(現実的に外  
の党—軍は解体しているのだが再建、再生の道  
をさえ閉ざされるという意味)を結果する。萌芽  
的であれ赤軍派の大菩薩(被告)国民達が一切の  
無かる否マイナスから出発せざるを得ずしか  
かかる重大な責務を負っていかなければならない  
という困難、に対し、我々は、ほんの少し、  
側面からしか援助できないということをおぼし  
く思う。だがやはり「12人の死同志達の血と死の  
教訓は、我々の肉体精神内部に血肉化されなけ  
ればならない」し、又 Mの同志の発言を媒介  
にして真実の解明に接近するの、一番正しい  
やり方だと思ふ。だがこれは限界があることを  
認めなければならない。不連続・移行—過程が、  
存在するが故連続している傾向としては明らか  
になっても、その移行飛躍の契機媒介はやはり  
不明である。しいていえば72.7.5をMakmalにし  
て、Mの同志達が着ている以上の飛躍がある  
こと、これを明確にしていかねばならない。

99

適合赤軍一統一赤軍の組織→新党結成の過程に解決の鍵はかくされていると思う。

②の党内論争→党内斗争→①分派斗争→④赤軍。①→②→③が直接④に移行するのは、やはり赤軍の組織内部の墮落腐敗がうきであるのだが、今回の事件は、反革命-----としか評価できない。理由④敵対矛盾と人民内部の矛盾の処理の仕方の相違を意味にし、相対的矛盾を絶対矛盾・敵対矛盾に転化させ処刑した。④B.政治過程を一切捨棄した地平で人民裁判がなされた事、つまり敵一味方生死のRWの現実過程でなく味方内部の向題としてしか対象され裁判されなかった。超主観主義の化け物。⑤共産主義的規律とは、自己規律(B.内部一兵士)として存在しなければならず、他から強制するものではない。⑥革命的自己犠牲心(兵士)の悪用。⑦加刑の発想法がB.思想に架っている。現代スターリン主義。或。根本はマルクス・レーニン主義と無縁である。以上悪軍の限りをつくしているのだが決してこれは客観的に言えるのではなく我々主体内部から発生している事と考え私自身の向題としてもっとキチンと整理したい。でも余りにも言葉一理統のもつ直しさは一体何か。何を言えない。

Ⅱ もっとかゝるはよく覆張っている(相対的に弱体だが)

Ⅲ せいぜい発展して下さい。

Ⅳ A.なし B.健康です。

I-A. B. コミは新聞の他に週刊誌2冊、雑誌と何かの軽井沢野特号(石原差入)ですが、(注)この冊約28章ぐらゐ消されている”ので情報の状況とは知っていることを全部書くべきなのかなと思うのですが何如、一般的に撰者の経歴現在の居所(K. 署名名)、書意の可能性に關することを論じた部分の記事は全部消されていた様です。いわゆる人民裁判に關する情報では消された箇所は少なかつた様に思いますが、可成大きな斗争が予定、準備されていたらしいことは(2・17斗争一週年記念“暴起”として)伝えられていましたが始めから軽井沢で銃と Docking する予定を準備してあったことについては、B. コミ以外で最近始めて知ったのです。妙ギガヲ担いで山を下って一固定忠治の脱出行の様には都市のアツト入り込むつもりだったのかと思っていました。

B. コミでは大した情報はありませんが以前話したところのある片山謙治さんが赤軍派加盟以前の進藤隆三即同志と親しい知り合いだったそうです。御両親と面談があるかどうか判るまいけど何か協力に依頼することはできるかもしれません。

情報の量といつても他の同志と変わる記はない

し、それを加藤山アツトが通報でわけて---から書き並べるのは氣おくれがするし意気も薄く様にも思ふし、奥拘には他の同志が沢山いるのだから僕は召還します。

I-B. 先ず僕は最高指導者2名の除名要求をしたのですが、これを撤回しなければなりません。除名したところで今回の「事件」を総括し、我々の体質を変えることにはならない、というよりむしろ簡単に除名してしまつては総括ができなくなるのです。自分の一時的な激昂を上野同志の「政治は常に暴徒に」にのっけて、「もう同席できない、どうしてくれるんだ」とやったのは革命家としてあるまじき態度でした。しかし、除名すべきか否かと問われれば(そう言う人はいない様だが)今すぐ「すべきでない」と答へ、さる自信がないのです。どう考えたって許されない行為だと思ふ気持ちにはならないし、殺された同志達(實際に殺されてしまったのだ)にしたところで「繰り返さなければよい」とは云わないだろうと思ふかろうです。日本階級斗争史の途て背負い込んだ上を解明すべき向題なし何しろ大きすぎるのです。勿論これを償還は何年かけてもやりきらねばならないし、やつてゆくつもりです。前便では親怒のあまり僕自身がこの行為に加担したのだということ(単にB.総括の統性ないぞだけではなく)を懸念する傾向があった様に思ふます。「僕自身はあの

事件について何をどう自己批判するのか」ころ問われれば先の誤りを後の戒めとすることはできないのです。その意味で先日書いた手紙には、コトの指導者の直管の向題に還元してしまう傾向がみられたのは恥しいことです。そんなことではない。弱い者は去れという発想や、妻や恋人俗世界の友人達、革命運動に直接役に立たぬものは切り捨てる(ことを強制する)発想は大かれ少なかれ誰をも持っていた。自己の内部で反撃しつづき籠抱えていたのです。勿論これは赤軍派だけでなく普遍的な向題です。哲学的次元での根源派的な、人間が生きているということをどう考えるのか、世界をどう把握するのかといった考え方のものにズレがあったということが言えると思ひます。ああすればよかった。こうすればよかったでなく、この様な誤りというのは革命派が現実の重みを担い斗いを推めようとするればする程その内部に必然的に産み出すものさす。革命のせつち病それは僕等が最初から持っていたものだった。

僕は12・18中央軍アピールは基本的には支持していた。銃と人との關係に一切を切りつめてしまつており、視野が非常に狭まっているという批判が同志達から強かつたし、實際それは向違いない事だと思ふ。しかし、それでその「人と銃の關係」は革命戦争が実践的段階に突入して始めて体得できたことであつて、この様な史裡に裏打ち

された素晴らしいものだったと思う。(それ自体としては)しかし現実の部内<sup>隊</sup>の状態は、そうした理念と対峙するものになっていた——どうしようもなし——ということの様です。言いかえれば、中央軍アピールはそれ自体としては素晴らしいものだったが階級斗争の重要なポイントである味方内部の矛盾と現実を正しく反映してはいなかったのです。隊内タコソボ化は相変らずだし「自発的な隊員同志の政治対論が活発に行われ、それを常に組織化すること」は行われず、皆が「次は俺の番か」と内心に諦念を抱いていたのはB、Cの断罪を待たずもなく、事実だったのだろうし、充分あり得ることと考えられるのです。今迄共に生活してきた者が「誰かが納得しきる」理由なしに、(あったとしても)殺されてしまえば「次は—」と諦めるのは人間として自然なことです。「行為」はそれが何であれいつか必ず自分に迫ってくる。皆が「もの言はうは腹かくる技なり」「もの言はうは腹かくる技なり」と黙り込んでしまえば逆に皆が一層皆立っただろうし———悪循環です。

M作戦当時、その前から隊内タコソボ化はあったのです。論争の枯渇、政治なし、作戦不成功→アツトでの餓死状況というの誰かが感じていた。何とかしなうとしていた。が、どうにもならなかった。根は全く同じです。当時は襲撃隊がそれ程蒸付まっていたし、永い間の共同生

活による自然発生的な「偉業」——「なあなあ」とも言う——があったし、そういう牧歌的状况の中でなんとなく済んでいた。ところが状況が劇化し、人民革命軍との合同(断固支持?)によって、これまでの自然発生的共同性では通用しなくなり、党内民主主義、隊内共産主義の質が躍らかに、むき出しに向われる様になったのだが我々は充分な解毒を実践的に与えきれなかった。銃と人の結合が銃と幹部の結合=軍事を技術に一方化する傾向=人間を道具視する考え方、といった地下軍事組織の自然発生的性、M総括の(組織化の)不充分性とか現実の味方内部の矛盾の把握の仕方の誤りとかが原因であるとは言えます。しかし現場の同志達にしてみれば2名の最高指導者を含めてどうしようもなかったのだろうし不可避だったのだろうと思います。現実の至愚を見ては「無理もない」と言える。だが恐怖政治(テロリズム)は政治の本質だといった宿命説へ走るのではなく、僕等は、この様な事態を不可避であろうと何であろうと何であろうと避けねばならなかったはずだし、それは人類の意志の名において、革命の歴史の尊厳の名において保持されねばならなかったと思います。少くとも指導者にはそれは行う義務があったと思います。僕は2人が失格だという気持ちに変りはありません。

II. 奥西救護会(烽火派等)と奥西M社との

接触、提議、交流、論争がすすんでいることを大森同志から聞きました。非常にいいことです。僕も進言しようかと考えていた矢先だった。赤色救護会の任務とは連合赤軍などの蜂起一戦争派 or 各種武装斗争を支援し、人民の反撃網を組織することだと思っています。「蜂起一戦争派はあまりにも蜂起一戦争派を知らなすぎる」と大森君は言っています。救護活動の対象を連合赤軍兵士に限ったりその他を差別したりすることがあるとすれば、それは閉鎖主義的の意味のないことだと思っています。あくまで武装斗争を具体的に推進するなかから第一歩をかちとろうとしているグループの岡いを救護することに意味があると思うし、それが潮流として存在しているのだから。現在赤救内部に日向まで含めた広義イデオロギズム救護統一戦線を云々する部分があるとのことですが、これは現実の基礎のない無理な話だと思し意味もないと思います。中核は反スタ主義、古い党の体質、反対派発想等を超越してどこまで連軍武装をすすめるか未知数だし、宮下派はフロントが総出出した様で無理のない話です。フロントを今後は未知数(可能性がある)と思うし、僕等は、僕等の政治を連合赤軍内部に限ってしまうのはナンセンスです。どう、パンフ等にもこの外部にまいてまうもの(連合赤軍内に限るもの)②蜂起一戦争派向の獄中活動家(社責同まで含めて一獄中を革命家の学校

に?)あたりまでとか ③最大限抜けばよくべきもの、の3段階に分けられると思います。④はもっがる通信で、例えば上野さんのどう(る種と)とか、不死鳥作戦等はもっがる通信特別号としてパンパン予定すべきだと思ふ。都市工・HJ支援派に限らず、米軍四兵士支援派とか、京都市民Gとか、岡山10日の会とか東京なる人民救護会がアワマ人民裁判事件に関する獄中書簡集を発行しようとしているし、全国各地に色々趣向をこらした運動・出版が行われています。全てが分散半ば孤立状態のため手工業的の消耗も多し、持続しにくい様な気がします。①の内用用アリストは別として、他のものは連合赤軍兵士以外にもワケを抜け、蜂起一戦争派(B・W派)と革命戦争派を区別(差別?)するなんてナンセンス極まりない。そこまで我々の間の論争は成熟してない)⑤總体の面での公開の論争の場を、至極的かつ持続的に保障すること、これが心願だと思ひます。対象はRG(赤報)、烽火、さうさまで含めて構わない筈、何にしては閉鎖主義が一番よくない。(対権力的次元に限らず)基調するのが一番よくない。インボ粉砕? もっがる通信は非常に結構、簡潔でしかも格調の高い文章です。何というエライさんが書いてるのかわからないけど……さ、絶対に、何が何でも持続すること、違ふせないことと最大限講義者調を求むることに尽きます。例

えは上野毛の秘密者の倉持智弘さんや、城岡の井田さんに色2度3度送ってお願い下さい。冗談もなく、振込用紙を添付して、そこいさの中にバラまくべきです。一方部の「前進」より一回のゲリラは人民を表す」にしても、Bコミの社会問題を終らせないために是非とも他薦です。

「緊急アンケート」への回答  
—赤軍兵士、川島玄一  
〈よと号ハイ・ジャクニ号〉被告

I-A. 殆んど読売新聞のみ。あとは、若干の週刊誌。

- B. これについては、3/17, 3/29 発信(〈よと号ハイ・ジャクニ号〉裁判ニ号支援委員会へ送付。)した文書(合計おね)を参照されたい。

II. 「諸君切」について、具体的には確人とのなつていないというのな現実である。差し入れられ、又文書類で知るのみですな。他の獄中同志と意見交換する時に、お互いに入っている文書と、入っていない文書を(つまりミスで入ったかたのせいでしょう)話し合おうなつてしまふことなよくあります。あとで「そんな文書が入ってたのか？」と納備しまふか。「も、おね他」について、とにかくロー一枚の形態でまよひなら、元氣振って現任の様に定期的な発行してゆくことな、形態やその内容については徐々に前進してゆけば良しな。

〈よと号ハイ・ジャクニ号〉裁判ニ号支援委員会の場合、定期刊行誌の発行件数は、今年年頭から得に次のよりにしています。すなわち、

① 〈よと号ハイ・ジャクニ号〉裁判ニ号ニュース月刊、支援委員会刊行誌=支援委員会主体

- 『も、おね通信』に担当。

② 『不死鳥作戦』(所載「ミニハンプ」)、月刊支エニ号員会刊行誌=被告団主体、(おね通信に携)

③ 『F』(所載「ハンプ」)、季刊、支エニ号員会刊行誌=支エニ号、弁士団、被告団

というもので、おね通信はこれから各支エニ号員会が全活動を集約する為にも早急に『も、おね通信』の恒常的発行と、獄中同志の士氣的情自の場(ミニハンプ)を確保する事が必要でないうか。(被告部の「獄中通信」の復刊は、又全然別の内面通信の問題です。)頑張ってくださいと思ひます。

III-A. 面会の場合は僕の場合、家族・支エニ号関係は毎週土休保証されています。しかし、同盟関係(含むおね)の接見は昨年九月末は以来「皆無」という状況で、(同盟関係)活動状況は殆んど解らなくなっていました。九月末は以来の接見(同盟関係)は、昨年中は皆無今年1月8日H。同志、2月15日F同志、3月16日G同志、3月21日F同志で、現在は十分です。月1回の希望したいと思ひているのです。接見してくれる人は僕が同盟関係者と確認できるのなら誰でも結構です。

但し、接見は基本的には僕ら獄中の者な電で要請する形になされるべきでしょう。(勿論獄外から早急に獄中の者に知らせたいこと、討

討したハニとある場合は別)。つまり獄外からの連絡事項は一般には文書差し入れ、時間的に出来るまで早くしたハニのものな八月まで最適であり、獄中からは、意見の手紙、連絡は、八月まで及び接見(何故なら発信制限の中で1つも四苦八苦しているのな現状でから)ということな。

- B. 健康状態は眼の痲痺と齒(前歯-1、奥歯-1、治療をすんで、すでに2ヶ月まつまど殆んどなをらなうでやんす)。を除いては健康、精神的には、正道土命の少少を学んで文士でやんす。元氣ではつはつとまでハニ革命に対する情熱は少しも衰えてはなるところな益々ファイトを燃しているのなから誤解なきように。

補:

今回の事態に、全ての書簡を日本赤色の探検で(本号は正しくは同盟情宣部と封印してやるのな組織原則ですな)、整理、編集し、全ての獄内、獄外戦士に配布する方針、全く要諦なし。これに加えて、組織的にまじめに計、てはいる部かの公開論争には積極的に参加できません。例えば『序章』と人民救済会です。あくまでも同盟の出版まで、これらは従てする、同盟のみに限定すると、どうしても限られてくる(購入してくれる人)ので一種の閉じ込められる危険性があります。先ず心まで

中島衛平(櫻村)

I. (A) 統戦戦リシ人組人に關する情報は大体わかり  
ます。「もっぴる」の同志には史の「新党結成」  
の周旋の真相を出来るだけ詳しく聞きかたして  
欲しい。この正否によつて、我々の政治的立場  
は如何変わります。以下は「統戦」の報トです。  
(「」内は私)

①永田・坂口より京決安保共斗グループは、昨年  
夏から十月まで西丹沢プロジェクトに集結して来たが  
ここに赤軍派の森ら大士人が参加してあり、両  
派は實質的に合同した。(12.18記念集会宣言では、  
両派とその他の人民革命軍、赤軍中央軍との政治路  
線指針に對しては、一応独立相対性を保っている。)

②西丹沢→井川プロジェクトへ移動するとき、京決  
安保内で二名の同志を殺害。

③藤名山プロジェクトで、12.29と小嶋・加藤・尾崎  
道隆同志のリンチ。リンチの決定は七人委員会  
-森・永田・坂口・坂東・吉野・寺岡・山田。  
④森自決によると、川野同志の「叛・輝燐による  
権威的」と在永田がはげしく批判。1月3日、新  
党結成(統戦)をつける前に、二月分(解)政治路線の基  
準は、赤軍派がも思想を評価する。革命左派が  
も思想の放棄を促すといふ範囲内で、  
中央執行委員の下に、各々の同志が旧赤軍・旧安  
保共斗・旧甲東安保として列挙されている。

要するに、革命左派(共産・赤軍派)が、発展解  
112

演じて、新党になつたのか否かの真相かわかり  
ない。これを聞きかたに、(できる範囲で)してほし  
いのです。

I. (B) もし、新党結成の専断がなれなれば、(統一赤  
軍の誤りの段階であつたならば) 討論の前提は①  
~⑤です。

①米日反動派とブルジョアジャーナリズムの思  
想政治的攻撃とはつきり一線を画しこれと闘う。

②今回の困難をもちつて55年六全共のよつに、修  
正主義、日知見主義、清算主義へ転換してはなら  
ない。

③マルクス主義の世界観と弁証法的分析法を  
応用する。リンチ殺人はじめ、多くの政治性ぬき  
の誤りは、銃をもちつてつうつう、軍隊のはじめ  
の経験、実践の中で、又米日反動派との苦闘の中  
で発生したものであつて、克服の対象である。こ  
れをもちつて、今回の軍事行動の成果面、同志の本  
質を否定してはならない。

④今回の苦闘をのりこつた同志は、同志であつ  
て(誤りを自己批判しなかつた同志ではない)  
その誤りの面をもちつて右翼的対応をしな~~ら~~  
なるな~~ら~~し、又その理由もない。

⑤我々のとるべき態度は、まず第一に、われら  
の到達した政治的段階に學ぶこと、次にその誤  
りを克服して、その目的とした偉大な闘いを続け  
つぐことである。こうしてこそ、犠牲になつた14  
113

名の同志達を真に革命烈士として追悼することが  
でき、その革命遺志をうけつぐことができる。

と、フル新の言うように新党結成にまで誤り  
が進行して来たならば私の態度は次のようです。

①新党、その結成過程の誤りを糾弾し、これを  
認めない。革命左派は健在である

②革命左派の指導部を反党派的に分派斗争を  
進めた誤りによつて解任、除名する。(リンチ殺人を  
行つたから除名するのではない) 指導部、転向  
したものを以外「新党」の下に属する同志は、再  
編した革命左派の下によびかける。支配権カとの関  
係として、除名した指導部を防衛するが革命左派  
の同志としては防衛しない。

③今回の軍事行動に關しては、その支持すべき  
点、誤つた面をはつきりさせ、つうつう経験として  
この闘いを受けつぐ。同志一派が六全協の時に「  
分裂して来た一派のがわによつて招集されて  
きた全国協議会」一派のがわの冒險主義の誤り  
として抗米援朝つうつうを清算し、自分の責任を  
回避したような反革命的清算行為はしない。

④赤軍派との關係については、この経験を反面  
教師にすることはあつても、現状を凍結する理由  
はない。一層両派の團結を促進し革命戦争の発展  
をはかりたい。両派の關係を名称、實質ともに  
連合赤軍の段階にもどす。(この組織的実態は、人  
民革命軍、赤軍中央軍の共同作戦、行動、連帯で  
114

あつて、連絡帯だけである。いかなる組織的  
合同もありえない) 赤軍派の指導部の問題は、  
赤軍派内部で、解決すべき問題である。

⑤新たに、革命左派の総指と再出発宣言を  
反し行動を開始する。昨年夏の統一赤軍に  
關する誤りについての指導部の自己批判が  
放棄され、連合赤軍が又いつのまにか統一赤軍  
になつてしまつたことその延長上の「七人  
委員会」の結成の誤りは、再度の重大な  
裏切りの行為である。しかしまだ同志的  
批判の余地があるし、又そうしなければ  
革命的利益にならないと判断したが、もし  
新党結成の陰謀にまで誤りが進行して  
いるならば、問題の次元は異なり  
ます。赤軍派との思想問題、政治路線  
問題の共通の獲得の任務が始まつたばかり  
で、解決してない時に新党を打ちあける  
ことは、革命左派、赤軍派の解消であ  
り、(我々の側から言えば) 先思想反米愛  
国路線の放棄、輕視、歪曲の誤り、組織  
的には解党行為であつて自滅、其倒れの  
道である。政治路線は(その中核として  
の組織)は勝利の保障であり、すべての  
闘いの要である。政治路線は、我々の  
組織、同志の團結の基である。指導部が、  
一時的利益のために新党結成したことは、  
われらが、政治路線の重要性、優位性  
の認識、革命組織のあり方を全く理解  
しておらず、無政府主義に陥つて  
いることを示す。(又この誤りは昨年  
の統一赤軍結成以来、二度目の誤り  
である)として、これは  
115

I A.読売新聞, NHKラジオニュース, ロコミ  
ナツ. 大きな感じはつかめている。

B.マスコミからの情報と前提とした私の感想  
。銃撃戦を断固支持します。やはり偉大な戦い  
です。

。「人民裁判」は明らか誤り。規律上、作以上の  
欠陥は唯一政治思想工作(教育)を通じ、人の思  
想の革命化を通じてのみ解決できる。戦術上の  
意見の相違も討論によってのみ解決できる。そ  
の基礎となるのはML主義の情勢分析であり調  
査活動である。リソチ構向は決して行ってはな  
らないこと。敵に対しても、殺された同志  
は立派な革命家と確信します。20数名中、12名も  
スパイ裏切り者があることはどう考えても不可  
能です。一名でも居れば、とっくの昔にパーに  
なっていたはずですから。またよしんば脱落し  
逃亡した人が居たとしてもそれだけでは日和見  
主義者の名には値するが、死には値しない。死  
に値するのは、闘争中の敵、死刑の裁きを受け  
た敵、明確な証拠に基づくスパイ分りや裏つ  
敵と通報している分りです。それに脱落逃亡の  
ことを考える時、指導的立場の者が、どのよう  
な政治路線・軍事路線をとっていたかが問題と  
なると思います。今回の「人民裁判」も指導部

彼らが自衛していようがなかろうと、反動裏切  
的な命争いであり、いわば指導部が自ら「新党」と  
いう別組織の人間へ移行したことを意味するので

昨年夏の組織的転換にかゝる重要な問題は全  
同志の問題であり同志に提起すべきであるとい  
うイロハ的な約束を放棄しその上革命左派を解  
消しているならば、我々はいかに同志的批判をし  
団結しようと努力しても、話になりません。我々  
はこの解党主義の陰謀を糾弾し、(批判ではない)  
指導部を、更りと解任除名し、毛思想、反米愛  
国路線と革命左派の真理を守り、これを再建しな  
くしてはならない。もしこの指導部に対する方法  
をあいまいにするならば、それは表面上はおだや  
かな気分を保とうとする日和見主義であり、その人  
は革命斗争はいかなるものかその革命組織、それ  
を構成する個人とは如何なるものか、という基本  
的認識に無自覚な人であり、真に人民の利益と解  
放について責任をとらない人である。私の腕を守  
る立場としての現在の考えは、以上のとおりです。

II. 12.18集会、今回の銃撃戦支持集会などにみ  
られるように、敏感かつ人民の軍隊に呼応する適切  
な反応が、赤救のカーの生命だと思ひ、これをカ  
ーに評価します。なごぶる通信も同様です。

とりわけ現在は、人民の軍隊の教育活動の主体的  
力量が弱いのを、こくに評価したい。

III. A. 家族、友人、京汝安保救討集、日に一回位

の路線の問題として解決することが最も大切な  
こと。果して指導部はML主義の正しい路  
線をもっていたか?私はいなかつたと思います  
。それだけでなくこんな信じられない事は、起  
きないはず。僕達反米愛国派は一貫して内  
ゲバに反対してきました。人民内部の矛盾は、  
武斗ではなく、文斗による解決を計るべきであ  
ることを表明してきました。そしてそのように  
実行してきました。だから今回のようなことは  
全く信じられない出来事でした。弁証法によれ  
ば、事物は対立する2つの面からなっており、  
ある条件のもとでは、互に転化しあうことが  
できます。このことを痛感します。我々が信頼す  
る同志も、彼らがML主義の正しい路線からは  
なれば、全く違ったものに転化する。今回の  
ような誤りを起すということ。 「人民裁判」  
12名の同志の「リソチ殺人」の要因は連署にお  
ける政治軽視(逆に言えば軍事優先)にある  
と考えます。ML主義・毛沢東思想の連署の条  
則は「党が銃砲を指揮する」「政治が軍事を統帥  
する」です。これは絶対的なもので、一歩も譲  
ることができないものです。「毛主席の軍事思  
想の核心は、とりもなおさず、プロレタリア階  
級の政治を突出させ軍隊の政治的な建設に重点  
をおくことにあり、また人の要素、政治思想の  
要素の決定的役割を十分重視し、戦争中の兵

士大会や人民大会の能動的役割を十分に發揮さ  
せることにある」(解放軍版)林彪の四個才(人  
の要素・政治工作・思想工作・生きた思想)に  
よる連署が最もよい例です。僕は「米日反動派  
の侵略戦争を革命戦争でうち破ろう」に簡潔に  
示めされている反米愛国の政治と、それに基づ  
兵士の政治的自覚こそ連署の要だと思っていま  
す。ところが、外の同志はこうしたことを軽視  
(放棄と言ってちよいかと思ひ)していったの  
だと思ひます。(これは人民革命軍と中央軍、日共革  
命左派と共産同赤軍派の矛盾の止揚の問題と深  
くかわりあっていると思います)彼らは、政  
治思想工作を通じ、人の思想の革命化によって  
政治面から軍建設を行おうのではなく、銃を金に  
頼り、技術に頼り、上からの命令と政治的自  
覚抜きで決意一般に頼り連署を行おうとしたの  
だと思ひます。これは政治的自覚、政治的団結  
自覚的規律の不足を生みます。そしてそれを克  
服するのに上からの規律、命令主義が生れます  
。これは互に再循環する。そして体制主義人と  
発展してゆき「リソチ殺人」が生まれたのは  
ないかと考えます。思想的には、主観主義・個  
人主義、盲動主義などのアチバル思想・ブル  
思想の残りカスが大きく影響していると思ひま  
す。それは、我々の隊列にまだまだ労働者階級  
出身の革命家が少なく、アチバル出身者が多いと



いうことを反映しているのだからと思います。我々はML主ぎの正しい路線を武装することにも、労働者の革命家を吸収することに努めるべきです。

。マスコミサイドの情報に加え、できるだけ早く、当時着の生の情報を知りたい。敵はこの誤りを利用して、デマ・デッチ上げを行って革命とリわけ武斗にあるん限りの悪罵を流げかけるであろう。デマ・デッチ上げは粉砕すること、人民からの批判は大切にすること、悪罵のないもの■である限り大いに鑑戒すること。誤っているものでもすなわきに過ぎ、辛抱強い覚悟によって克服するようすること。

I A. 3/4~3/5の半日間、金が切れこいたため、ブル新の購読ストップこの間NHKの7時のニュースのみ、多数公判で種々の事情を聞く、その他一切の情報なし(序章「人民救済会」からの簡単な特集のための寄稿要請文あり)、心理的恐慌状態をおこしていることを知る。) B①今回の事件—「同志間リソチ虐殺」事件の、客観的=階級的の性格は何か。これは確かに人民内部の矛盾から発生した■ものである。即ちフレームアップでも、灌入した挑発者以外の間の組織が組織した虐殺事件でもなく、人民内部の矛盾から発生したものである。だから人民内部の矛盾の問題として止揚し■うという考えは一見正しい様にみえる。確かに敵の手に委ねることなく人民■のきによって解決すべきだ(という限り)では絶対に正しい。我々は組織したものでない限りは、一切敵の介入を許すことなく、人民の手で解決しなければならぬ。(我々は敵が組織したものでも敵を粉砕するという仕方では人民自身の手で解決するのだ)しかしこのことにごまかしている限りでは、事柄の一面をしかなく、この事件のもつ本当の性格、本当の深刻さを見失うものであり、真に厳格な階級的観念とはいえない。この事件の本質は、人民内部の矛盾から発生しつ、反動的=反革命的

的=反革命的の性格をもちているのである。(以上からこの事件は、人民内部の矛盾に根柢をもちつつも、単に一般的人民内部の矛盾という枠をこえて反動的=反革命的に挑発的テロルという性格をもちた事件として捉えねばならぬ。従ってこの事件は本質的に、■プロレタリアートの階級斗争にとって徹底的な批判と糾弾の対象である。このことを冷徹な事実にしてみすえねばならない。このことを曖昧にしてはならない。(人民内部の矛盾が反動的な性格をおびうる根柢を、マルクスは「宣言」の中で指摘してきた。必ず資本主義に反抗するのは決して革命的なことではなく、反動的なこともある。彼等はただ自分自身の立場を捨て、その本来の立場=Pの立場に立つときのみ革命的であるのだと。ここでBも又人民の一部であり、更にたえずPの中に投げ入れられる。だから没落するBブルジョアを階級的基盤とする反抗、Bブルジョアの革命主義は、時として決定的な反動へも転化するのだ。革命ロシアでの左翼エスエルやマフノ団をみよ、又スペイン革命に於て、Bブルジョアを基盤としたスターリニストが、その武器をファッストに向けるのではなく、POUMをアナキストに向けたことを、我々はBに對するのでは別の意味で、反革命として糾弾してきたのではないか。(バルセルナで反革命であっ

件へと転化していること、人民内部の矛盾が反動的=反革命的の事件として起きたという真にある。(1)この事件には革命的暴力の要素はあるか?否、全く否!である。この事件には擁護の余地があるか?否、全く否!一片の余地もない、(2)この事件は革命運動、プロレタリア運動と全く相入れないばかりでなく、反動的に對立しているのです。これはプロレタリア独裁と共産主義社会をつくり上げていくプロレタリアートの自覚し、組織された固結の徹底的な否定であり絶望であり、破壊である。(例えばあの三里塚斗争が、その戦いの側面と同時に、大木よねバサンの「戦闘宣言」にみられる解放人の、革命への息吹き、固結、自覚をもっていることによって、本当に“革命”を全民族に感じさせたのに対し、今回の事件は、自覚や固結や革命への絶望を表現している。)まさに歴史的=階級的の性格において反動的なものである。(3)これが反革命的というのは72年前半期のこの重大な時期・階級的衝突が規模な一つの頂点へと向かおうとするこの時期に、革命運動と階級階級にはかりしれない打撃を与え、大陥没をもちた逆逆に敵に格好の、大いなる利用手段、反革命攻撃の手段を与え、現に敵がこの事件を最大限利用して、様々な攻撃を貫徹したということである。この意味ではこの事件は反革命的挑発とい

う性格をもちているのである。(以上からこの事件は、人民内部の矛盾に根柢をもちつつも、単に一般的人民内部の矛盾という枠をこえて反動的=反革命的に挑発的テロルという性格をもちた事件として捉えねばならぬ。従ってこの事件は本質的に、■プロレタリアートの階級斗争にとって徹底的な批判と糾弾の対象である。このことを冷徹な事実にしてみすえねばならない。このことを曖昧にしてはならない。(人民内部の矛盾が反動的な性格をおびうる根柢を、マルクスは「宣言」の中で指摘してきた。必ず資本主義に反抗するのは決して革命的なことではなく、反動的なこともある。彼等はただ自分自身の立場を捨て、その本来の立場=Pの立場に立つときのみ革命的であるのだと。ここでBも又人民の一部であり、更にたえずPの中に投げ入れられる。だから没落するBブルジョアを階級的基盤とする反抗、Bブルジョアの革命主義は、時として決定的な反動へも転化するのだ。革命ロシアでの左翼エスエルやマフノ団をみよ、又スペイン革命に於て、Bブルジョアを基盤としたスターリニストが、その武器をファッストに向けるのではなく、POUMをアナキストに向けたことを、我々はBに對するのでは別の意味で、反革命として糾弾してきたのではないか。(バルセルナで反革命であっ



たスターリニストもマドリードではファシストと勇敢に闘ったのだ) 今回の事件にそれとは異なる何かがあるだろうか。

②この事件は我々の全実践において、決して副次的・エピソード的問題ではなく、根本的・本質的・本来的問題である。この事件は軽井沢の銃撃戦と表裏一体のものとして、69年秋以来の我々の全実践・全役割の一つの到達点・凝縮であったのである。この事件には銃撃戦と共に、我々のこの2年半の思想・政治・軍事・組織・戦術・運動等一切の問題が凝縮し、この事件によって検証されているのである。この反動的・反革命的・排発的テロルが我々のこの2年半の全実践の一つの到達点・凝縮であり、我々の一切の検証であるというのだ。これは論理の示すところである。これを承認することは何と苦しいことか何と苛酷なことか。実際この2年有餘の階級斗争の過渡期は全流派をふるいにかけて、誠し、階級斗争のどのような位置にたち、どのような役割を果すのかを追ってきたのだ。そして我々は一つの方角を全力を上げて、真剣に、ひたむきに徹底的に追求してきた。極限にまで進んできた。その最後の結論こそ軽井沢の銃撃戦と今回の事件であったのだ。だから我々は苦しみと苛酷さに耐え、このことか目をそろすことなく冷静に、誠実に真剣にみつめなければならぬ。

③まさにこのことが我々に根底的な自己切開・総括・自己批判を要求する。このことを曖昧し、避けて通り、プラグマリズムで前へ進もうとする事は、我々がもはや革命運動・内の斗争の真剣な担い手であることを放棄することを意味する。根底的な自己切開・自己批判こそ現在の我々の特別の任務である。これを全力で遂行し人民のものをすること、これが我々の訓練である。これをなすことができないなら我々は内の革命運動の隊列の中に一つの流派としてごまかすことはできない。と同時に我々はたとえどんなに微力であれ、我々は階級闘争線に与えた大打撃を少しでも自らの力克服すべく当面の階級斗争の前進のために全力を尽くさねばならぬ。内の階級斗争の損失を少しでも取り戻すべく努力せねばならぬ。そういう態度をもちねば我々は内の階級斗争にとって無責任な集団としてごまかざるをえないであろう。(ここには我々の力の度合が問題ではなく志向が問題なのだ。) 根底的な自己切開・自己批判と、当面の階級斗争の一步の前進に力を尽くすこと、この両者を結合すること。この結合こそ今、我々が直面する任務の中心がある。(感想をつけ加えておけば、「外」はこの事件の本当の深刻さを充分理解してはいないようだ。いわば仲間うちの感覚だけ評価しているようにみられる。更に全階級の

規模からの今回の事件を評価しなければならぬ。僕自身も又根本的に自己切開し、総括し、自己批判して、もう一度根本的にやり直そう。こやどり直さねばならぬと深く決意している。

松田 久(乗物)

I. A 現在読者をとっており、この間夕木とれた同志達の在野(乗物)名、あるいは同志達各人の状況以外は殆んど伝えられています。

B. ★軽井沢銃撃戦についての僕の考えは、その直后「さっ、さる」に送った手紙に書きましたがそれは基本的に変わっていません。この悲劇が始えられ始めた頃、僕はこの銃撃戦を結局「血の森に咲いた仇花」であったのかとも考えました。しかしあの塚子さんに対する対応、大ごもに対する戦いぶり、少なくとも三人の獄中に於ける不屈の闘いを考える時やはり彼らは真の「革命の軍隊」なのだと思信するのです。彼らには絶望なんぞなかった。絶望からは戦いは生まれない。同志たち兄弟たちこのことを決して忘れないで下さい。この戦いの意義を断ぎ防衛するために獄中同志たち死を貫徹するように(どんなに苦しくとも貫徹するように)。

★いさよ「人民裁判」という悲劇に対してはとにかくくやしいよ、自分の無力さと、夕木

イ又ごもが、そしてこんな死にとどめられていることが胸をほりさげんばかりにくやしく、むなしさでやってくる。先ず我々のこの悲劇に対する立場を明確にしておくべきだろう(分析は立場そのものを検証するし、強にするが)オ一我々は「現実・真実」を恐れぬ革命兵士であること、オ二、リンチした同志も死んだ同志も敵り又ペイでない限り、革命の為に戦った革命兵士であった事「泰山より重い」革命兵士一人一人の死を、して無敵にしない事、オ三、我々は団結をより一層拡大強にしなければならぬ事、特に赤軍派と曰共革命左派の団結は維持されるべきである。(この悲劇は二つの組織の合同から起ったものではない)オ四これを機して敵は政治、思想的、組織的、軍事的全面攻撃にでると思われるがオ五日本に於ける社会主義革命戦争、又長期を残酷性におなっている持久的ゲリラ革命戦争を、こつとやるという確信、オ六力コロータリ人民、被抑圧人民に立脚するならば必ず勝利しうること、党派性がないまいだった云々がはなく、なによりも階級性がないまいだった事、オ七、銃撃戦この悲劇を表裏のものと捉え、悲劇を克服し銃撃戦を継承、発展させる立場に立つこと。(革命の軍隊建設の過程での戦いがあり悲劇であること)。

★悲劇の根源は直接には都市から山岳への後退にあり、結果からすれば武器を使いこなせなかったということにある。山岳への後退という防禦状況が①過度の組織力集中、②閉鎖主義の極限化の軍事技術主義への傾斜、③敵、味方友が見えなくなり脱隊が生まれそれに対する機密保持が「絶えざる限りなき同志愛」を全て歪曲された「絶えざる限りなき不信」に変え、④一方、没階級の唯軍隊的規律、将兵不一致を招来したと思える。この防禦状況は敵の全国一斉捜査傾向、アパートロー作戦に有効に対処しえなかった結果がある主体的に云うならば「党の軍化、陣中の党」は前哨的ゲリラ戦を切り拓き展開したが、それだけでほとんど不十分であった。「不十分であった」というのを単に「陣中の党」を「よくわかっていなかった」という偶然的なものとか、あるいは個人的なものとして考えるのは誤りである、我々はゲリラ革命戦争路線に於ける体系的組織論を獲得してはなかったといえる。理論的には古くから《三種の軍隊》即ち軍、地方軍、民兵が云々されていても、その具体性もかく得ざる方法を知りたてたのである。直感的、抽象的にいえば、党の軍化は軍の党化を同時に推進しなければ中途半端な怪物になってしまうということ。即ち戦いの力ではなく宣伝者、組織者にならないならば革命の軍隊の階級性はないこと。党の軍化は「軍の党化」を

ってゲリラ革命戦争へ依拠できるのだということ。戦術、戦術の無制限な展開の延長にゲリラ革命戦争への依拠・社会主義革命戦争の発展があるのではないこと。主体の変革＝党の質的依拠（人民との直接的関係における）こそが依拠の環である。★都市ゲリラ革命戦争路線をこの悲劇から清算することは絶対誤りである。理論主義に陥ってはいけないうこと、理論的には、日本に於ける都市ゲリラの存在と発生の可能性と戦略面における発展と勝利の可能性しか明らかにしえないのだ。現実には敗北することも考えられる、しかし歴史的世界的視野からみれば必ず勝利する。★政治面では「米、日帝国主義の侵略、反革命戦争を革命戦争で打ち破れ！」を徹底すること。政治、思想は革命戦争の魂である。これらの一般の問題については銃撃戦終結の号紙に書いてある。

★組織面では、当面大事なことは、赤軍派と革命左派の関係をどうするか、思想が違ひ、理論が違っていた両組織がむりやり組織合同したからだということに帰因させてしまう悲観的、清算的見解に絶対反対すべきです。團結はどんな事柄があっても正しかったし今も正しい。我々はむしろより一層強固に團結をすべきだ、たとえ考えるべきだと思ふ。地下革命武装勢力は発展強化していかなければならないのです。（具体的方法、形態は問

題が残されると思いますが）、我々は理論的にはかなりの相違がありますが、何として政治的思想的に相違してはいたわけにはありません。なぜなら政治思想性は、互により、階級性にあるからであり、理論ではないからです。

II 赤教の現在の諸活動についてとやかくいうべきものはありません、かつて僕は「12.18赤教復興大会」設立趣旨の内幕について、日帝の侵略・反革命戦争を（社会主義）革命戦争で阻止し、打ち破るを前面に出すべきだと主張しました。それは今も変わっていません。しかし、現在問われていることに対して「救済会」という立場からは答え切れないような気がする。先進帝国主義国内における「革命の軍隊」の建設という視座から解答を出さねばならないからです。それなりに発達した資本主義国家アメリカにおけるツパマロスは各地区別の武装細胞と「ツパマロス支援委員会」という組織構造をもちている。「——支援委」の特色は戦闘部隊とほぼ同一の「区別」と「秘密性」の原則ののちった構造をもちている。「その任務はパンフの配布、物質輸送、学習ワークルの組織、募金、隠れ家提供、負傷者の看護等を、時には戦闘部隊よりも激しい非合法活動にも従事しなければならない、必要な時は大衆的行動にも参加する、（「アメリカの都市ゲリラ」現代の眼3月号）

このような支援委員会が赤色救済会とは別個に必要な気がする。又、仏ソロタリア左派の如く工場門口を主体にした「民兵作戦」の一環として「赤色救済会運動」は展開される必要がある。僕は率直に言って今までの「赤教」はよく闘ってきたし、旧来のセクト別救済細胞よりはるかに秀れていると考えています。今回のこの悲劇を媒介にして、様々の今までの欠点、欠陥が目につくようになるかも知れませんが、小さな欠点、欠陥に過大視し、大きな問題を見誤るまいようにしてほしいと願っています。とにかく清算主義は絶対反対です。どんなに苦しくても「さぶる通信」は定期的に発行して下さい。

III A.B. 差し入れ、面会希望は別にありません。健康は良好です

補 獄外、獄中の同志たち、友人たち全てが、腹をわけて、正直に率直に意見をのべてあげることです。「團結—批判—團結」の精神を各、革命組織、救済組織、弁護団は團結を強化しなければならぬ。個々の獄中戦士へ解答を送るとありますが、各々の場合によって違ひはあると思ふけど、それは大変な労力もいると思ふます、ごく簡単にまとめるだけというのではないでしょうか？

この悲劇が「革命の軍隊」の建設の過程のものである以上、僕は今までの「建軍」の総括をしな

ければならないと思、います。

同志たち、友人たち、この悲劇を「反革命」とあるいは「狂気」とのしり批判するのはたやすい。しかし僕たちはそれが任務ではない、僕たちは、革命兵士だし、革命組織です。日本の社会主義革命戦争は想像を絶する苦難に立ちこめ、長期にわたるものなのです。まだ始まったばかりなのです。犬どもに気をつけて下さい、お元気で。

I A. 情報源はB. 新 (それも週刊誌の広きなど)、并  
護士からちょっと。

B. (1) わからないことだらけです。なかむ山岳集  
中アツト方式、リソチは理解できない。しかし、  
この山岳集中アツト方式が躍きのオーバであった  
ことは確かです。高度に発達した資本主義国を  
戦場としなければならぬ我々にとって、この山  
岳集中アツト方式は、対権力との関係において、  
人民との関係において絶対に誤りであるときわ  
なければなりません。「発達した文化と組織性」  
もつ日本では、B. 政府が通信、交通、情報、教育  
を管理することによって、B. は人民をより巧  
妙に支配してきた。B. 政府は高度に中央集権化さ  
れた統治機構を持ち、そのもとに人民をがんじ  
がらめにしばりつけ、自己の支配を脅かす存在  
を無力な存在に変えてきたのである。こうした帝  
国主義の心臓部を無台に革命戦争を押し進めるた  
めには、武装革命勢力は政府権力の暴力装置と一  
体の圧倒的なプロパガンダ—監視体制から自由で  
なければならず、初期の段階では特にそうである。  
それには、中国やインドツナのように、解放区・  
根拠地を防衛拡大していく方式は不可能であり、  
日本の革命戦争は、地下組織・統一戦線を防衛し  
ていく都市分散アツト方式を採用しなければなら  
ない。この地下組織・統一戦線方式は、敵がう差

命を防衛していくだけでなく、人民を積極的に  
革命戦争に引き入れ武装革命勢力(党・軍・統一  
戦線)を運送していく上でも適切な方式である。

何故なら、革命戦争は都市プロレタリアート。そ  
れも未端労働者、被抑圧民族或の下層人民に依拠し  
て展開されるからである。我々は彼らと結合しそ  
のみ革命戦争を発展させるからであり、また  
それのみ特権化し小ブル化している上層人民を  
革命の主体へと改造することが出来るからである。  
その結合形態について、敵の圧倒的制圧下で  
平板な統一のそれはあり  
えず意志一致の内容を基に比較的ゆるやかな  
大衆組織間の提携から厳格な軍事上の統一戦線  
まで、多面的立体的な団結が実現されなければ  
ならないのである。これらの点から、我々の活動基  
盤は都市であるねばならず、当然にもその形態は  
分散方式である。ここで連合赤軍は決定的な誤り  
を犯した。主力部隊と武器を一ヶ所に集中するこ  
とは、全滅の危機と同屋していることであらう。ゲ  
リラの生命ともいえる、行動の自由を奪う結果に  
なる。(赤軍派は前者について甚深での苦い経験  
を持っている) 2月中旬の山狩りで連合赤軍が一  
拳に敵の掌中に落ちていく過程(最大限の反響を  
試みているが)は、その山岳アツト方式の誤り  
を如実に物語っている。そしてこの山岳集中アツ  
ト方式が、もう一つの誤りあの「人民裁判→リソ

チ」を準備していったのだらう。この大所帯が  
秘密の保持を困難にし組織の厳密さを失わせ、  
不断に組織の危機をもたらしたのだと思う。また  
他方では路線問題や誤ったアツト方式に対する  
不信・動搖・反発が生み出され、隊内の団結を絶  
えず弱めていったのだらう。だが問題は主体が不  
可避に特に右い意識や非プロレタリア的傾向を  
それ自体にあるのではなく、そうした体質・傾向と意  
識的に闘い革命戦争を担うにかかわり主体へと  
改造していく方針とその形態方法である。革命戦  
争の発展と合致しない主体の消極的否定的要素は  
人民内部の矛盾として敵対矛盾と区別して解決さ  
れる必要があり、我々はそれを説教と学習、相互  
批判・自己批判を通じた思想改造—教育運動とし  
て実現していかねばならないのです。この整同運  
動によって、個々の誤りは是正され規律そのものよ  
り高度な内定を獲得していく両者の弁証法的な発  
展が可能になるのです。規律は尊重され厳守され  
ねばなりませんがその為には上からの一方的な押  
しつけであってはならず隊内共産主義の文物とし  
て絶えず是問され相互の自覚的なものへと高  
められていかねばならないのです。連合赤軍のも  
う一つの誤りあの許し難い恥すべし誤りは隊内矛  
盾をそれぞれ政治工作—理論斗争、教育—整同運  
動を通じて正しく解決するのではなく上からの官  
僚的な規律を押しつけることで処理しようとした

点。あのBの營養手段である徹底した人間不信に裏付けられた恐怖政治によって組織防衛をはかるようになった点。あのスターリンレーニン主義の鉄の規律を教条的に固定化して自己の反対者を「肅清」したのと同じやり方で「革命」を防衛しようとした点にある。連合赤軍は、人の要素・思想の要素・政治の要素・組織の要素を軽視する唯物主義におちいることによって、その兵士の革命に対する熾烈・献身性にもかかわらず革命を担う主体とは無縁な存在へと変質していったのである。その精神的荒廃振りはあのリンチだけでなく脱走や自首・投降、自供などの敵権力への惨めな屈服にも現われている。連合赤軍はその革命精神を喪失することでお蔵したのだ。

(2)赤軍派中央軍は11月頃までは都市分散方式をとっていたようであるが、それが何ソで12月頃京浜安保共闘の山岳アツトに合流する破目になったのだろうか。菩薩の敗北を経験し、下層兵との結合を主張していた我が赤軍が何ソで山岳集中アツト方式をとる誤りを犯したのか、私には理解できない。ただそれが(1)敗北の延長上にあっただであろうこと、つまり(1)での誤りを意識化し克服するのではなく逆にその誤りを徹底化し純化していった結果に他ならないという意味では理解しうる。(1)での誤りとは、70年末、安保共闘の12・18斗争を契機とした階級斗争の新局面に直面して、それまで

これがダイナミックな運動の展開を困難にし、防禦的守勢へと追い込み「山」へと孤立させていったのだと思う。主力軍のもとに地方軍・民兵軍・諸政治軍事組織を統合してより高度な戦闘を実現することができずそれと一体の地下組織・統一戦線を形成しえずに単発的なゲリラ戦や組織力・兵站力の貧困を技術的にカバーしようとする空想的資金徴発斗争に陥ったことは、その軍事至上主義一人の要素を軽視する唯物主義一を示している。この軍事至上主義の組織的表現が党と軍の正しい結合、関連性を保持できずに、党を軍に解消したり、党を軍に従属させる傾向である。軍の中の党によって、党は軍を手段化した(意兵化した)りすることを克服し、軍をまた軍事一ばりの観点と斗い自らを軍事請負集団と化することなく、プロレタリア思想・共産主義的政治を媒介にして両者の有機的結合を実現し、プロレタリア軍事を獲得することができるとです。軍の中の党は、軍の自己絶対化、軍事の自然発生性と斗うことによって將と兵の同志的団結を可能にし、この軍と兵との結合を実現しうる。連合赤軍は党を軍に解消あるいは従属させることば將と兵・軍と兵人民の正しい統一を見失い、人の要素を欠落させた唯物主義に陥入り、あのBの傭兵供、反革命軍の何ら変らない存在に転落していったのだろう。

(3)連合赤軍の誤りは、同盟と兵人民に計り知れた

の路線問題の決着が向われていた時、我々はそれをいまいなまる放棄することによってそれまでの蜂起路線の空論主義、軍事上の選定主義即ち「左翼日和主義に陥っていたことである。左右の日和見主義たる蜂起路線を確立し、ゲリラと蜂起を統合した革命戦争路線を確立し、連合赤軍のゲリラ戦争を開始することが向われていたにもかかわらず、そうした課題に無感であったことばゲリラ戦の原則を徹底的に適用できず長期のゲリラ戦を展開する障壁を準備できず、我々は多くの同志を敵にころれ敗北した。従って(1)を担った者は(2)路線一蜂起主義の誤りを完全に理解し、ゲリラ(戦争)と蜂起を結合した革命戦争の軍事路線を確立し、連合赤軍のゲリラ戦争を堅持していくこと意志一致する必要があった。その意味で(1)は「一時の失敗、なかばの不意でしかなかった」のだ。しかし獄外の同志たちはこれらの誤りに気付かず経験主義的なゲリラ主義一形を変えたB主義に陥入り(1)それによつて物斗争をもち用始された日本革命戦争の2段階が要求していた、軍事斗争と政治斗争、戦争(ゲリラ)と蜂起を結合した「赤ソ路線としての革命戦争路線」への全面的な攻撃の課題にこたえることを不可能にしたのである。経験主義的なゲリラ主義を純化してゆく誤りは階級一党・軍一意味階級。この三音の連環を見失われせ

い打撃を与えた。彼らは取り返しのつかない誤りを犯したのである。彼こそ人民の(権力ではない!)裁きを受けねばならない。ゲバラの機嫌ではすまされまいだろう(彼らには同じ戦列にいる資格はない。彼らが自覚的に同盟を去らうとしないなら、かつての同志であった我々一特に血を分けた兄弟分であった(1)の我々が最後の同志的批判として同盟からの脱退を通告すべきだと思えます。(もちろん救済活動は続けるべきですが…)そして兄弟分であったが故に彼らの誤りに寛大であった(1)の我々も何らかの罰を受けるべきだと思えます。とまあ我々の現在の任務は連合赤軍の誤りを正しく解明し批判しきることであり、プロ思想一共産主義的政治(軍事)を正しく継承し発展させることだと思えます。

I A. 新潟・ロコミ地から

以下、詳細略

B, A の状況より判断する戦士の考え、意見

(1) 銃撃戦に關して

・アツト発見されたことが大きな犠牲を余儀なくされた原因です。しかしこれについては、N同志が警察に面が割れたことが原因ですがN同志はアツト焼きにいったら〜4人の同志にY同志脱走をY同志に知らせにいこう命令されてこの命令を実行すべく行ったが途中で道にまよつて(脱走を考えられるが結局は同じ)町中へ出てき遅延し警察に面を割られてしまったものです。このアツト焼きの原因は全く道理に外れた同志のリンチ殺人の結果、おそれおそれ、ある同志が逃走したのが原因です。これが大原因といえます。つまりリンチ殺人がアツト発見の根本的原因です。ですからN同志に直接責任はない。リンチ殺人を指導した同志にある。

・アツト発見の危険性というのは、現在の敵味方の力量差が常に存在しています。ですからアツト発見—全量不当逮捕ということでは全く闘うことはできません。これを防止する手はないか。①常に退路を確保しておくこと②常にじん速に退却できるように遷移体制を整えておくこと③さうに退却の過程にあつては、仕掛け(地雷等)、しんが

ことはゲリラの原則、よく軽井沢まで踏戻したと思う。④軽井沢銃撃戦支持する。①をうけ継ぎ、銃の威力を十分示してくれたと思う。警官隊に発見されるや、銃撃戦を応えていったことはすばらしい。会社奪占抑は正しい。足場を固めて銃撃戦を大々的に展開する意図の表現とみられる。ここが婦人入籠ということになりすが、これはこの場合、たまたま占拠したところに婦人が居たために起きたパニック的なものでしかない。入籠をたてに銃撃戦という意図が初めからあったのではない。すぐ婦人を解放するかどうかは重大だが彼らには、考えるゆとりがなかったものと思われる。理解できる。だから敵の入籠キャンペーンは世相操作の「おとり」にすぎない。入籠の安全を配慮しているかのように見せかけたのは乗込。入籠に悪影響を十分知りながら、発煙筒、放水、ガス弾などがちかちかしていることからも明らか。要は、一日、一時間、一分、一秒でも早く斗争を圧殺して銃撃戦の威力封じ込めであった。ライフル部隊が狙撃を狙っていたのはこれをまっともよく示している。しかし狙撃はなかった。どうしてか？これは五戦士が全く自分達の行動を敵に見つかぬよう行動していたため、入籠もいることだし、世相の手前銃は使用できなかったのだである。敗北したとはいえ、銃撃戦は銃の質をよく示してくれたし、他党派を励まされていりし、大きな意義のある斗争であった。

川隊を編成し、敵を引きつけることなど抵抗すること。という手段をとることでしょう。

◎どうして、山岳に、しかも全量を集結させる、ということをやったのか？今でもまだ少し疑問です。①ブルマスコミは都市アツトがローラ作戦のため覆されたかちといっている。私も初めはそう考えていた。しかし理に滝田修同志ら多くの同志は逃走しているのであり、ローラ作戦によって都市アツト増減とは思われない。でも我々の力量がなかったのか？もしそうであるとしたらゲリラ斗争は不ぞうということになる。考えてほしい。私は支持者がいるかぎり可能と考えているが。②自供を読んでみるかどうか③ではないように感じる。現在の連合赤軍の質では斗えないから、高い質を有した軍に育成するため、とみられる。どうなのだろうか？

◎発見されたあとの行動について。①妙義山中のアツトの中で発見される日、敢然と銃撃戦を闘った森・永田同志の斗争は支持する。どんなに不利になろうと我々は敵に屈服するようなことはありえない。生命をかけて闘うべきだ。また銃撃戦は日本では初めてであり、この銃で武装する必要性を示したと思う。ブル新でも言っている通り、銃の目的は「敵の消滅、味方の保存」の軍事法則を貫く最高の武器である。(銃器の目標は人体)②妙義山系屋根越えを評価する。敵のズキをつく

今日の向題点とは、銃を便する戦士をいかにして生み出していくかという実践的な問題である。

②)リンチ殺人について、これについてブルコミでいろいろギャーギャー騒ぎ立っている。我々は現象に惑わされず、本質をこま正しく認識し、発展の基礎としていくべきでしょう。

◎同志の殺害は明らかに人民内部の矛盾を敵・味方の矛盾として処理した結果であり、誤ち以外の何物でもない

◎どうしてこのようになることになったのか？同志を殺すのが目的ではなかったであろう。ではなぜよう、理由があったのか？これは彼らの口から聞かなければ本当には解明できないでしょう。このために私は慎重な態度をとってきたのです。千手するに敵権力を喜ばすことにはなりません。あえて言えば現状の連合赤軍兵士の質ではどうみても、これ以上ゲリラ戦を闘っていくことはできない、質を高めていくしかない。どうしたらよいのか？彼らにもはっきりわかろうか？だと思ふ。そこで自分達の基礎に合わせ、強結した個人的な階級の克服を即座に要求し兵士はどうか？ハマをやった絶対的革命総括というテロの下に、リンチされ殺されていったものと思ふ。指導部には、これしかないと思つたのではなからうか。組織防衛も同じ発想からでしょう。ブルジョア的の階級をこま正しく

→脱走者(ある程度関係する)=警備人の密告者ではないのである。これは我々の組織の経歴から言える。彼らは我々の矛盾者であるのである。カンパには応じてくれるのだ。また各種のブルジョア的々陥はだれでも持ってはいるし、直す意欲はあり(方法がわからなければ)教育と切傷の方法で解決していくべきもの。これらはマルクス主義の個人である。指導部にはこの観念が全くなかった。指導部の資格なし。またそもそも組織合同の基礎が誤っている。実践面では不十分で政治オーラのつかう政治路線一致以外は合同にはならない。昨年度夏の批判が全く理解されず「野合」になったのがそもそもまちがいの。これが基に存て、組織強化のためとして人脈主義(結婚命令、官言)をとり、あやまりがあやまりを生み(当然矛盾は激化するばかり)とうとうリンチ殺人となってしまった。合同事件の批判が根本的。

以上、まともいがありませんが

(1) 軍の質を高め(2)理論をも養うめていて(3)組織合同し(4)新党・高品質の下、ゲリラ戦を闘うという意図は評価できる。近い将来、現状では心算とされていることでありましたから。しかし段階を越えて何もかもやっ飛ばさうという実践においては、ことごとくマルクス主義から外れ、それがつもりつもって、リンチ殺人という誤ちを結果として生じた。と考えているのです。

144

故連合赤軍14兵士氏名

大槻節子 (24)	遠山美枝子 (26)
尾崎充男 (21)	行方正時 (22)
金子みちよ (24)	早岐やす子 (21)
加藤能敬 (22)	西山茂徳 (21)
小嶋和子 (23)	山崎順 (21)
遙藤隆三郎 (22)	山田孝 (27)
寺岡恒一 (24)	山本順一 (28)

145

# 人民の軍隊には何か

「政党が自己の誤りに対して取る態度こそは、その党がどの程度まじめなのか、その党がじつこいその階級と労働大衆に対する義務を遂行しているかを批判する上で、最も重要、最も確実な方法の一つである。誤りを率直に認め、その理由を確かめ、こうなった条件を分析し、これを是正する方法を徹底的に討議することこそこれがまじめな党のしるしであり、その義務を遂行する方法であり、階級、さらに大衆を教育し訓練する方法である。」(レーニン「左翼小機関について」)

## 3・31人民集会報告

### 「人民の軍隊には何か」

我々は、赤軍派、日共革命左派の人々が真剣にこの問題に取り組み、武装闘争として日本階級闘争を発展させてきたことを知っている。しかしその血の結晶とも云うべき連合赤

146

軍は、果して人民の軍隊として、人民に奉仕する軍隊であったのか?

WKKKKは、涙をのんで、否、と答えねばならない。連合赤軍は、重大な誤りを犯した。

WKKKKは、階級矛盾と階級闘争の問題を正しく理解し、処理し、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し、処理しなければならぬ。60年代後半以降降つて来たWKKKKの教訓をもとに、確信を持って云えることは、WKKKKの進むべき道は、自らが武装することであり、武装することによって階級矛盾と階級闘争の問題を正しく処理して行くことであった。そして、この困難な事業に先頭を切って着手、結成されたのが連合赤軍であり、「互いに相手を盟友と認め合うことの勇氣」「団結のすばらしさ」を基調に、人民の武装を呼びかけ、WKKKKの進むべき道を大胆に突進して行った。しかし、敵の死にもの狂いの弾圧によって人民との結合を阻まれていたとは云え、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し、処理して行くことに於いて、連合赤軍は重大な誤りを犯した。一たび、14人もの同志を殺してしまつたのか?

同志殺し—この問題は、60年代後半以降降つて来たWKKKKが一貫して引きずつて来た問題であり、WKKKKの内部の川上し性の露呈として、負困なる共産主義政治のあらゆる膿をしばり出した敗北の軌跡として、今回最も象徴的に現われた問題である。従つて、WKKKKは

147